

本年 8 月 27 日に出現した大流星

紀伊 小 旗 孝 二 郎

本年 8 月 27 日 19 時 (午後 7 時) 39 分、豊後水道の南方の上空に一大流星が出現し、折よく大分市、広島市、和歌山市、鳥取市、姫路市の諸地方より観測されて、輻射点出現点及消滅点の高度、経路等の大約の値が知れたので、その結果発表するこゝにした、

1°. 観測報告

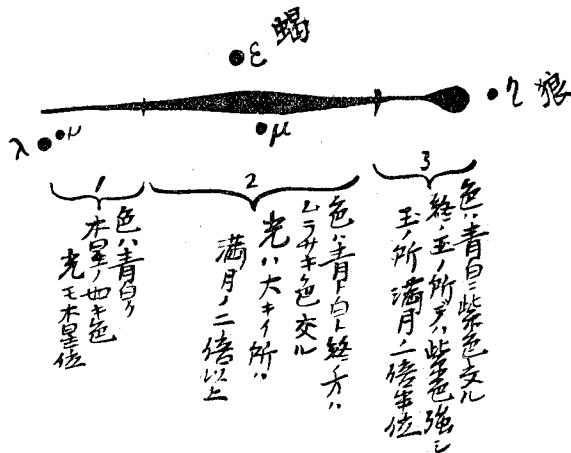
A. 和歌山市上鷹匠町の高城武夫氏の報.

27 日午後 7 時 39 分西天に人目を驚かして光輝の強大な流星出現. 當時西天に薄雲あり.

繼續時間 0.6 秒, 光度 金星の數十倍?, 速さ rR, 色 WB, 痕 (3°), 出現点 $\alpha=14^h35^m$ $\delta=-19^\circ$, 消滅点 $\alpha=13^h50^m$ $\delta=-15^\circ$ (雲の中に消えたる爲不確)

B. 広島市河原町の大橋登潮氏の報.

27 日午後 7 時 39 分頃, 空は快晴, 速度は甚緩, 経路, 色, 光度等は下



圖参照. 痕の繼續時間は 3 秒乃至 5 秒位. 見取圖より推定すれば出現点は約 $\alpha=17^h24^m$, $\delta=-35^\circ$, 消滅点 $\alpha=16^h0^m$ $\delta=-38^\circ$ である.

C. 大分縣臼杵町の龜井壽彦氏の報.

27日20時前後(不確)、龜井氏の附近の二三の人々(星に對する智識殆んど無き人であるが)の觀察を綜合して次の如き報告をされた。

光度は甚強く、空が満月の出る前位明るくなつた由、色は始め赤、後、青色、音響は聞かず。徑路は、出現點の方向は射手座 ρ の少し北、消失點の方向は蛇遣ひ座 ϵ と ζ の間、或ひは蛇遣座 ϵ の北方かも知れない。

D. 姫路市八代町の脇英夫氏の報。

27日午後7時50分、蝸座の α 星と西北の地平線との中間あたりに、東方より西北に青色の美麗な光芒をひいた大流星出現。流星の色は低空であつた爲か眞赤であつた。

E. 鳥取縣岩美郡米里村の谷口重敬氏の報。

27日午後7時30分頃、鳥取市西南に當つて大流星現はる。恰かも數米前にて青色光の瓦斯ランプを點じたるが如く、又、閃光の如く、約5秒間邊りを照し、西方に向つて消滅す。あゝに長き尾を引いてゐた。(見取圖が添付されてゐたが不明瞭であるので、省いて置いた)。

F. 鹿兒島縣揖宿郡指宿村の田中鐵馬氏の報。

27日午後7時40分頃、座敷で新聞をよんでゐた處、突然庭が明るくなつた。青白い丁度月の様であつた。光り初めてから二秒程の後、一旦暗くなり、又少しく明るくなり、一秒後には元通り暗くなつた。當夜は月なく、空は快晴で、大流星ならんと思ひ、十秒程の後東天を仰いで見たが、其れ等の形跡はなかつた。音響は別に聞えなかつた。

× × × × ×

2°. 輻射點の決定

姫路及び鳥取の觀測は不明確なる故を以て暫くをき、和歌山、廣島、臼杵の三個の觀測の經路を逆に延長して見るに、輻射點は 山羊座と射手座の境界附近、赤徑=20時、赤緯=-20度の邊なるを知り得る。經路の觀測は三者何れも良好のものではないから、數度の誤りは止むを得ない。しかし恐らく5度以上の誤りは無からうと思ふ。

流星出現當時の太陽の黃徑 $\odot = 153^\circ 40'$ であるから、其時の地球運行の方向は、黃徑 64° の方向(即ち牛座のヒアデスの北方に當る)となる。した

がつて此の大流星の速度を拋物線速度のものご假定すれば、流星が我が地球大氣の圏内に突入したる方向は、赤經 $=260^{\circ}$ 赤緯 $=-23^{\circ}$ 換言すれば蛇遣ひ座の γ 附近なる。

3°. 流星の實經路の推定

流星の出現點に最も近い臼杵の觀測は、前述の如く龜井氏の直接に觀測されたものでないので、これに重きを置くことは出來ぬ。和歌山のものも報告者の言はるゝ處によれば、星に對する位置は翌日なされたる由にて、これも充分正確とは言はれない。随つて經路の推定には大いに注意をはらひ、幅射點との關係なり、方位角、高度なりを適當に採用して、最も確であらうと思はるゝものを決定した。然してこれまでも可成、實際との相違のあることはまぬがれない。

出現點の位置は三者の觀測が可成よく一點に一致して居た様である。即ち豊後水道遙か南方、日向灘にて大約の位置は東經 $=132.1^{\circ}$ 、北緯 $=北32.2^{\circ}$ であり、出現の高さは海上約百軒であるらしく、あまり高いものではない。

この點にて光り始めた大流星は進路を西北に向け地平より約 30° の傾を保ちつゝ、大分、福岡二縣の境に近い日田盆地を目がけて突進し、美々津川の河口附近より九州本土の上に移り大分、宮崎二縣の境傾山の上空約 60 軒の點で消滅した事なる。

經路の實長は約 90 軒位なる。

4°. 光度・痕・色等

光度については、可成り大光度のものであつたらしく、田中氏が座敷の中でその明るさを知られた事、又龜井氏報告のものにても大光度なりし事を察知し得る。直接實見者の光度の推定は區々で、この程度まで信を置いて好いか不明であるが、金星の數倍乃至十數倍は少くともあつたものご考へられやう。色は赤色で、青白色の光芒を跡にのこして飛んでゐたと言ふことは可成り一致してゐる。速度の觀測は全く不充分であつて、和歌山の觀測は稍短きにすぎるし鳥取の觀測は稍長きに失するか？ 然らば田中氏の 3 秒ご云ふのが眞に近きか、經路の實長が約 90 軒である處から見れば秒速 30 軒ご云ふ速度は流星として普通のものである。

5°. むすび

流星の出現は全く豫想を許さない。斯の如き大流星は甚だ重要な価値を有するものである事は今更云ふまでもない事である。今回の観測に流星課の観測者は一人も見得ず、随つて充分研究の出来なかつた事は甚だ遺憾であつた。全國に散在する同好會員にして今後かくの如き流星の出現を目撃せられたならば、報告の勞をこられたきこを切に望む次第である。報告の内容は「天界」9巻一月號の筆者の記した観測法に随つてもらひたい。

去る十月十日大分縣に落下され隕石

去る十月十日大分縣に隕石が墜下した。此の事は、暫くの間は殆んど世間に知られず、地方の「大分新聞」でさへ、十一月一日に至つて始めて紙面の記事としたこいふやうな有様であつた。吾等は幸ひ會員清水義雄理學士の厚意によつて下の如き調査書を得た。

上井田隕石調査書

大分縣立竹田中學校教諭林勝見氏調査

時日 昭和四年十月十日午前十一時

場所 大分縣大野郡上井田村宮生(ミヤナ)森男民前庭(豐肥線諸方又は朝地ヨリ約三十丁)

狀況 森氏妻女(42—3才)庭ニテ栗ヲ選ビツ、アリシニ遠ク飛行機ニテモ來ルナラシカト疑ハレル位ノ微カナ音ヲ約一時間許前ヨリ聞キシト。然シ或ハ昆虫ノ唸リカモ知レズ。落チタル時ハシユウト音シテ森氏邸ノ土質(黑色凝灰岩ニ輕石ヲ混シタルモノ)ニアタリ輕石ハ約二糎ノ厚サ缺ケ隕石ハ正北ノ方向ニ約四米許轉ゲタリ。妻女ハ誰カ石ヲ投ゲタノカト思ヒシ位ニテ轉ガリシ石ヲ拾ヒシニ熱ノタメ掴ミ得ズ。之レガ隕石ナラント直感セシ由。森氏ハ以前小學校長ナリシガ今ハ退職シテ農業ヲナシ當時不在ニテ畑ニ出テ居リシガ妻女ノ報告ニテ歸宅セシ時ハ其ノ石ノ溫度尙ホホヤ々々位ナリシト。此家ハ南西向キノ家ニテ前庭ノ面積七間ニ二間半位。即チ十四五坪ノ庭ナリ。

隕石ノ大サ 質量 15瓦(水中ニテ9瓦) 比重2.5

縦ノ長サ	30.5糎	横ノ長サ	22.0糎
縦ノ周圍	77.0糎	横ノ周圍	60.0糎
體積	6立方糎		

色 黝黑色

形狀 圓滑形ヨリ想像シテ廻轉運動ヲナシテ落チタルガ如シ

磁性 ナシ

調査月日 昭和四年十一月三日

可なり疑はしい節があるので、近々出張の序でに實見したい(山本)